研究大学における初年次教育の現状と課題 一九州大学の場合—

川島啓二 九州大学

1. 九州大学における基幹教育

九州大学における初年次教育を語る上で、平成26年に開始された基幹教育カリキュラムを抜きにすることはできない。基幹教育院は、基幹教育のマネジメントや学生支援等を担当する組織として平成23年10月に設立された。教員58人、医師・カウンセラー16人、技術職員6人という人的体制である(平成27年度)。

基幹教育とは、「専攻教育と協働して、生涯にわたって学び続けることを幹に持つ、行動力を備えた人材であるアクティブ・ラーナーへ求められる能力を培う」ことを目的とし、そのための具体的な目標として、①進展するグローバル社会で求められる、深い専門性や豊かな教養へとつながる知識、技能を身につける。②新たな知や技能を創出し未知な問題を解決する力である「ものの見方・考え方・学び方」を身につける。③既存の知識から解答を探すのではなく、自発的に問題を提起し、創造的・批判的に吟味検討することができる主体的な学び方を身につける。④ものの見方・考え方・価値観の異なる人と多様な知を交流し活動する能力、差異を認め合う共感性、そして問題解決へと導くコミュニケーション能力を磨く。⑤他者との対話、共に学ぶ協働、そして自らを振り返る内省のサイクルを通じての力を高める。⑥生涯にわたって学び続ける強靭な幹を育む、とされている。

基幹教育科目の構成としては、基幹教育セミナー:1単位、課題協学科目:2.5単位×2、言語文化科目:12単位(英語7~10/初修5~2)、その他、文系ディシプリン科目、理系ディシプリン科目、健康・スポーツ科目、総合科目、高年次基幹教育科目からなっており、1年次で36単位を取得し、卒業までに48単位が課されている。また、基幹教育院は基幹教育のマネジメントを主要に担う教員組織であり(教育組織ではない)、基幹教育カリキュラムは全学出動体制によっている。さらに、基幹教育カリキュラムの決定機関は全学の組織である基幹教育委員会になっている。

九州大学における初年次教育科目群は上記のような構造的な基幹教育カリキュラムにおいて理解されるべきものであり、初年次教育科目が単体として存在しているわけではない。あくまでも、学士課程から大学院までを通底する教育プログラムである(ハイエンドリテラシーを育成するための大学院基幹教育プログラムも開講されている)。ただ、その中においても象徴的な科目として、「基幹教育セミナー」「課題協学科目」があるので、以下、その2つの科目について説明する。

2. 基幹教育セミナー

基幹教育セミナーは、1年次前期の必修科目1単位で、学部混成の24人程度のセミナー形式で行われる。その特徴は、①自らの「大学における学び」を他者に説明する、②他者の「大学における学び」に耳を傾ける、③「自らの学び」も相対化させ、省察するというセミナーであり、変化や多様性の中で、生涯、他者の意見に耳を傾け、柔軟に適応しながら、自律的に学ぶ〈基幹〉を育成することを目的に行われる。より端的に言えば、アクティブ・ラーナーの育成、「学び方」を学ぶということである。九州大学はなぜこのようなセミナーを実施したのか。

背景的な問題意識としては、「科学技術が急速に進歩しグローバル化が進展する現代では、一人ひとりが変化や多様性と"しなやか"に付き合い、柔軟に適応していくことが求められます。このことを可能にするのは、私たちの生涯にわたる自律的な成長を支える〈学びの基幹〉です。すなわち、社会の諸課題や自己について創造的・批判的に吟味しつつ、自ら問題を発見し、絶えず主体的に学び続ける態度です。本授業は、異なる専門分野を目指す学生および教員との対話や、それを踏まえた自己省察を通じて、一人ひとりが〈学びの基幹〉を育むことを目的としています。」とされている。

具体的な学修目標としては、①一人ひとりが自らの大学における学びについて深く問い、またそれを他者に伝える体験を通じ、大学における学びへの意欲を高めること。②自らの学びが持つ可能性や意義について自分なりの理解に基づく説明ができるようになること。③こうした仲間との対話や自己省察から新たな気づきや疑問を発見する過程を通じて、創造的・批判的に問題に取り組み学んでいく態度を培うこと。④仲間(他者)と学ぶ意義について自分の言葉で説明ができるようになること、とされている。そのような学修目標を、文理混合のクラス編成で、違う興味、違う見方、違う考え方をもった者と、自ら考え、問いかけ、リフレクトシートにまとめたりしながら、それをプレゼンテーションにつなげていくという共同作業に能動的に取り組むことによって、大学で学ぶ意味について、その内面化を達成しようという考えであるといえよう。

本科目の基本情報を整理しておく。1年前期必修で1単位, GPA をつけるのではなく合 否判定科目(電子シラバスにルーブリックあり), 1クラス=学生22~24名(様々な学部から混成)+教員1名, 1ユニット=3クラス(標準的には教員3名=基幹教育院教員2名+他部局1名), 平成27年度の場合, 39ユニット, 117クラスが月火木金の5限に分散配置, 担当教員向け「手引き」を科目実施班で作成・提供し, 標準的授業プランを提示している。15回の授業の流れの標準的な例としては表1のとおりである。

表1にあるように、標準的には、15回のうち11回が個別クラス (クラスごとの授業)、3回が合同クラス (ユニットごとの授業)、1回が一斉クラス (各曜日の全クラスが集まっての授業) ということになっている。授業の最も重要で究極の目標である「本番発表」は第9~14回の個別クラスにおいて実施され、各学生が12分の発表を行う (1回につき4人程度)。テーマは「自分が大学で学ぼう (または、取り組もう) と考えていること・ものについて、その内容や楽しさ (やりがい) などである。各発表に対しては、他の学生からのフィードバック・シートで「もっと知りたい点」、「自分だったら工夫する点」などが伝えられる。聴き手の学生が記入し、教員を介さずに発表者に渡すことになっている。その狙いは、発表者にとっては、問い直す→発表する→フィードバックを受ける→振り返る、聴

表1 標準的授業プラン

1	オリエンテーション 対話と学び	9	▶ 本番発表 4名/回	
2	▶ プレ発表	10	> フィードバックシート	
3	▶ 大学で学ぶ意義(グループ学習)		(発表者へのコメント)	
4	教員による「私にとっての学び」1	12		
5	教員による「私にとっての学び」2	13		
6	教員の学びから(グループ学習)	14		
7	講義・演習「ロ頭発表・文章による 表現について」	15	まとめ	
8	大学で学ぶ意義を考える(グルー プ学習)			

き手にとっては、傾聴する→フィードバックする→自分に当てはめて考えるという、振り返りを何度も念入りに促す構図になっている。また、発表者は発表後に要旨を提出する。

本番発表にいたるまでの授業内容も、対話と省察を促すような「仕掛け」が丁寧に、ある意味で「しつこい」ぐらい配置されている。第1回(合同クラス)のミラーリングによるアイスブレイクに始まり、第2・3回(個別クラス)の2分間の自己紹介によるプレゼンテーションの「予行」と大学での学びに関するグループ学習、第4・5回(一斉、合同クラス)では教員による「私にとっての学び」を題材とする講義やプレゼンテーションと問題提起。第6回(個別クラス)では教員の学びから自分の学びを考えるグループ学習、第7回(合同クラス)では、本番発表の作り方、パワーポイントの使い方に関する講義、第8回(個別クラス)では卒業時の自分を考えるグループ学習、という具合に、自らの学びの在り方を他者との対話を通して深め、気づきからの更なる対話によって、一層の深まりへとプレゼンテーションへの準備が、時間を通して熟していくように構成されている。

対話と省察という仕掛けは、さらに念入りに、毎回の授業の最初・最後に記述・提出させるリフレクトシートによって強化される。学生が授業中に書き、教員がコメントを付けて次週返却するのだが、前回授業を終えてから今日までの自分の学びや関連しての出来事を授業開始時に書き、今日の授業を振り返って気づいたことなどを授業終了時に書かせて、学生の振り返りを促す。このやり取りは、学生と教員のコミュニケーションに貢献しており、筆者の授業経験を通じても、大学入学当初の学生に安心感や教師との信頼感を基本的に構成することには効果的であると思われる。なお、この授業モデルはあくまでも「標準的な例」として提示されているものであって、特に前半の個別クラスでのグループワーク等においては、各担当教員の創意工夫が加えられている場合もある。

3. 課題協学科目

九州大学基幹教育カリキュラムの、いま一つの「看板科目」は課題協学科目である。1年次の前期・後期必修科目で各2.5単位となっている。クラス構成は文系・理系学部の混成により、方法としては講義+演習形式で、あるテーマに対して文理様々な方法論でアプローチし、グループで議論し、現状を把握し、自ら問題点を見いだし、情報を集め、他者と協力し、問題解決の道筋を創造して、実践していくこととなっている。目的は、同一テーマに対する複数の学問的アプローチを体感する他者との協力により思考能力を高め、自主



図1 授業スケジュールの具体例

的に学習を進めることができる姿勢を獲得することとされている。

課題協学科目は基幹教育の一つとして1年生が前後期ともに受講する必修科目である。文理混合した約150名の学生によってクラスを編成し、クラス毎にテーマ(教室テーマ)を設定する。専門分野の異なる3名の教員が一つのクラスを担当し、各々異なった視点から、教室テーマに沿い、かつ、グループ学習に適した題材(協学課題)を提供する。授業では学生が協学課題を考えるために必要となる講義を行うが、講義形式の学びだけでなく、個人演習による自らの学び、そしてグループ作業等による学生同士の学びも重視する。グループ作業や個人演習を通して、幅広い視野をもって問題を発見する姿勢、問題の解決を目指して学び続ける態度と技能、専門を異にする他者と協働できる能力を養うことを目的とする。学生へのメッセージとしては、「社会に眼を向けると、政治や経済、地球環境、エネルギー問題など、明確な答えのない問題に溢れています。…(中略)…このような諸問題に直面したとき、現状を正しく把握して自ら問題点を見出し、情報を集め、他者と協力し、問題解決の道筋を創造して実際に解決できる能力が求められます。基幹教育では、皆さんが早期にこのような能力を修得できるよう、課題協学科目を1年前後期とも必修科目として用意|しているとされている。

授業スケジュールの具体例は図1の通りである。授業は1クラス150名で、1クラスを約50名から構成される3つの小クラスに分割し、週1日2コマ(3,4限)連続で開講される。課題協学科目の課題の設定では、九州大学教育憲章が掲げる4つの原則、「人間性の原則」、「社会性の原則」、「国際性の原則」、「専門性の原則」に関わり、しかも現代社会に生きる市民に求められる以下の4つの基本課題、「知識を考える」、「生命を考える」、「創造を考える」、「共生を考える」に沿った協学課題を、担当教員の専門分野に則して選定している。課題協学Aでは主に「知識を考える」と「生命を考える」に沿った協学課題を、課題協学Bでは主に「創造を考える」と「共生を考える」に沿った協学課題が用意されており、学生は課題協学AとBを順不同で前・後期に一度ずつ履修する(図2参照)。

実際の教室テーマと協学課題の例を表2に示す(平成26年度の場合)。

4. 実施体制

既に述べたように、基幹教育カリキュラムは全学出動体制で運営されている。特に、初年次教育科目である「基幹教育セミナー」と「課題協学科目」については、定められた割合に沿って、各部局から「出動」してくる科目担当教員(毎年もしくは2年ごと程度で顔ぶれ

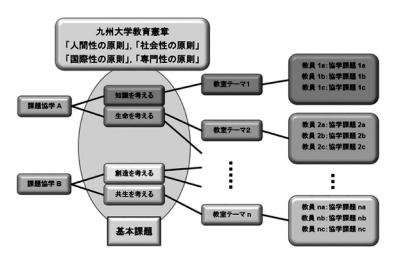


図2 課題協学科目の課題の設定

表2 教室テーマと協学課題の例

	これからの健康と医療と暮らしを考える						
内田(経)	健康・医療・暮らしをよくする仕組み						
吉田 (医医)	暮らしの中の生・老・病・死と医療						
★田村 (基幹)	食の安全と健康						
	大発見の瞬間						
岡崎 (法)	言語における大発見						
小早川 (基幹)	生物における大発見						
★山田琢 (基幹)	物理における大発見						
知識と予測							
陳 (基幹)	リスクとの向き合い						
阿部 (比文)	社会における知識の活用						
★木村 (基幹)	学問の盛衰を予測する						
	価値観の理解・共有から創造へ						
鬼丸 (比較)	国際社会における「価値」の創造―「神々の闘争」をいかに解決するのか―						
牛尼 (芸工)	ソーシャルメディアで新しい社会をデザインする						
★山田政 (基幹)	これからの人材が「社会」をつくる~来る時代を支える人材育成を考えよう~						
	『死と生』―宗教・倫理・科学の視点から―						
鏑木 (比文)	宗教・哲学から考える						
丸山 (医保)	医療倫理学から考える						
★岡本(基幹)	脳科学・医工学から考える						
	つながりを知る						
山下(人環)	人のつながり						
仁田坂 (理)	生き物のつながり						
★斎藤(基幹)	つながりの数理						

が変わっていく)によって支えられており、科目の理念、目的、方法等の共有が非常に重要になってくる。その一助として、基幹教育セミナーと課題協学科目においては、授業運営のマニュアルを作成し、科目の内容と方法についての共有化と質の維持を図っている。また、カリキュラム全体の運営体制としては、基幹教育委員会-基幹教育実施会議というタテの体制と、科目実施班連絡会議というヨコの体制で、日々の運営を担っている。これらの組織メンバーは、基幹教育院教員が中心となるが、各部局メンバーも加わっており、全学によって担われる基幹教育という体制を担保している。特に基幹教育委員会は全学レベルでの委員会組織である。実際の授業運営は教員3人を一組とするマギストーレス(MagisTORES)という九州大学独自のユニット体制を組み、他部局教員や初めての科目

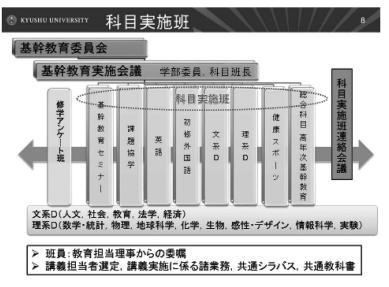


図3 科目実施班

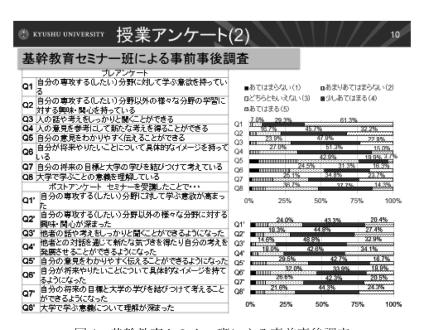


図4 基幹教育セミナー班による事前事後調査

担当者へのサポートと教員間の相互刺激や、合同クラスと個別クラスとの組み合わせによる教育方法のバリエーションといった効果を生んでいる。MagisTORESとは、教師を意味する magister と 3 を意味する tores との造語である。リーダーは基幹教育院教員が務める。

5. 評価

基幹教育セミナーと課題協学科目においては、それぞれ独自のアンケート結果を学生から得ている。

基幹教育セミナーの事後においては、「他者の話や考えをしっかりと聞くことができるようになった」「他者との対話を通じて新たな気づきを得たり自分の考えを発展させることができるようになった」「自分の意見をわかりやすく伝えることができるようになった」

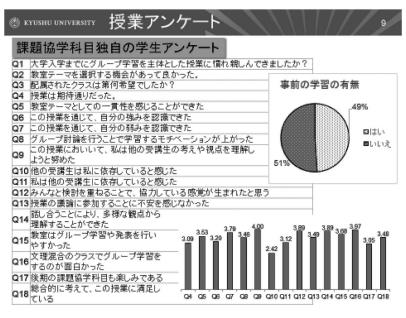


図5 課題協学科目独自の学生アンケート

KYUSHU U	NIVERSITY 研究	大学における	初年次	マ教育科目 1
東北大学	差役ぜる	5学館で必修、5学館で選択必修	平均15人	「研究をするには何か必要かり、「大学に入学した技能ですが成さ しなければならないのかり、そうした疑問に対して、学生とのコミュ・ケーションを密にし、学生とのコミュ・ケーションを密にし、それープに、対して、大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・
東京大学	初年次ゼミナール文料・理料	基礎科目必修	20名程度	①高校までの学習とは異なる、7 学における主体的な学習の意義 を理解できる、②教員や学生との 討議を通じた学習の意義を理解 をる、③アカデミックな作文に執 れ、その作法の基礎を理解できる。
京都大学	ILASセミナー(少人数級育 科目群)	選択科目(平成27年度は半数 号 講)	5~25名程度	未知の事象や問題に対する探す 心、創造性を養い、問題解決能 力、免表能力、討論能力などの当 使的能力を身に付け、同時に、1 四科目学習への準備を整える
名古星大学	基礎セミナー	必修	12名程度	教育目標:高いコミュニケーション 能力、社会文化の多様性の理 解、思考力・批判能力、社会的] 任と倫理
北海道大学	一般教育演習	一部の学部で必修	20名以下	高校までの学習から脱却し、大: 教育の特徴である白ッ的な学習 態度を身に付けるための構改しる 図る
大阪大学	基礎セミナー	選択必修	平均10.9名	研究のための基本的な態度を習得により学習意欲と創造性を刺 する科目。体験的課題追求型授 ま

図6 研究大学における初年次教育科目

「自分の将来の目標と大学の学びを結びつけて考えることができるようになった」「大学で学ぶ意義について理解が深まった」といった項目の有効度がうかがえる結果となっている(図4参照)。

課題協学科目では、「この授業において、私は他の受講生の考えや視点を理解しようと努めた」「みんなと検討を重ねることで、協力している感覚が生まれたと思う」「話し合うことにより、多様な観点から理解することができた」「文理混合のクラスでグループ学習をするのが面白かった」といった項目での効果がうかがえ、科目の目的が達成されつつあることを期待させる結果となっている(図5参照)。

6. 研究大学における初年次教育

研究大学における初年次教育科目は、各大学においてそれぞれの目的に応じて展開されている。簡潔にまとめれば図6のようになろう。その中で、九州大学における基幹教育セミナーと課題協学科目は、2科目を組み合わせて、対話と省察を重視する基幹教育セミナーによりアクティブ・ラーナーとしての基礎を培い、対話と協働を重視する課題協学科目によって、アクティブ・ラーナーとしての初歩を体験させているという意味で、構造的でもありマインドセット重視という特徴を持っていると言えるかもしれない。このような特徴は、リテラシー重視の初年次教育科目とは異なった特徴を有しており、九州大学基幹教育の成果が、今後どのように発揮されていくのか、注目されるところである。

なお、平成29年度から基幹教育カリキュラムが改訂され、基幹教育セミナーはクォーター科目として、課題協学科目は後期のみの開講となる予定である。

参考文献

- 野瀬 健他「基幹教育セミナーの実施体制について」 『基幹教育紀要』,1, pp. 57-62, 2015, 九州大学 基幹教育院
- 小島健太郎他「新入学生の意識調査に基づく基幹教育セミナーの学習成果の検討」『基幹教育紀要』, 2, pp. 73-85, 2016, 九州大学基幹教育院 平成 27 年度基幹教育履修要項